

ちひろさんの絵を、私は母から教えて貰った。

子供の頃の我が家には、ちひろさんのポスターや絵本が沢山あった。

しかし自分が美術を学ぶようになってからしばらくの間、私はちひろさんの子供たちの絵を無邪気に喜べなかった。家の中で出会う彼らは、そこに閉じ込められる事に抵抗し捻くれた自分とは別の存在と感じていた。

それから時間が過ぎ、現実には子供と向き合う事になって、自然とちひろさんの絵本に手が伸びた。ふくふくの幼児の手のデッサンが自分の視点と重なる。

その洞察力は生々しく、色は水に溶けて滲んで流れ、乾き、イメージと融合する。時間に委ね、生じる紙上の色の移ろいを、ちひろさんは愛を持って見つめていたのではないか。ちょうど、ひとりぼっちで世界に出会い、驚き変化する子供たちの瞳を見つめるのと同じ様に。

幼少期に埋め込まれた沢山のちひろさんの眼差しは、私自身にずっと寄り添っていたのだと思う。

不思議な繰り返しの物語みたいだ。

中谷ミチコ

東京都出身、三重県津市在住の彫刻家。石膏と樹脂を主な素材とし、平面と立体の間を往来する作品を制作。イメージの源泉としてドローイングによる表現も行う。